

一 理想の君主

「王様万歳、女王様万歳」

この国の民がこぞって、この日だけ開かれた王宮の庭で、国王と女王に向かつて、手を振ったり、叫んだりしていた。

王と女王は城のベランダに立ち、金の縁取りをした衣装を身にまとい、手を振っていた。二人共、体は大きく、目鼻立ちにはつきりとした高貴な顔立ちをしていた。

「そろそろお時間でございます」

宰相がカーテンの陰から、二人にそう告げると、二人は笑顔のまま、城の中に戻った。

「聞こえますか、あの民の歓声を。この国の民は、本当に二人をお慕い上げているのです」

手を揉みながら、宰相が言うと、女王は相好を崩した。

しかし、その横を王は無言で通りすぎ、お付きの者と共に、姿を消してしまった。

「また、あの塔の部屋か。よっぽどそこがお気に入りに見える」

不満そうに女王は鼻を鳴らした。

「恐れながら、女王様。目を通していただかねばならぬ文書が届いております」

「また、仕事か。王は自室にこもって道楽にふけておるというのに。まあ、よいそれでも。私の執務室にその文書を持ってくるように。それから、例のゴブレットも」

「またあの薬草ですか。女王様もお好きですね」

「そうとも。何か悪いか？宰相も飲んだらどうだ？若返るぞ」

「いえいえ滅相もない。私はあのようなまずい薬草を飲むぐらいなら、年相応に老けるのは一向にかまいません。私の喜びは美食として」

「美食と女であろう」

女王が着替えをしながらいじわるそうな目で言う。宰相の目の前には一糸纏わぬ女王の裸体が現れた。乳房のあたりに大きな傷がある。それを女王は隠そうともしない。

「恐れながら、女王様の若者好きには及びませぬ」

「はは、言ったな、宰相」

お付の者に簡素な着衣を着せられた女王は、それでも輝くような圧倒的な存在感を見せていた。

「滅相もございませぬ。これから薬草を用意させます。少々お待ちを」

「ああ」

女王はその場に立ち、少し考えているようだったが、すぐに、隣の執務室に入った。

二 隣国の使者

「おそれながら女王様」

宰相は寢室の戸を開けると咳払いをした。

「何だ」

寢台の中から、女王の半分眠った声が聞こえる。

「今朝、隣国からの使者が参りました。是非とも女王様にお目通りを願いたいとの事です」

「そうか」

返事をする、女王は立ち上がり、宰相の前に裸体を見せた。

「お召し物をお持ちしました」

宰相の後ろに待っていた衣装係が、さっと女王に上等の衣を着せ、黄金の帯を締めた。

「今朝はますます美しくあらせられます」

「何、毎日同じ事を言っておるのじゃ。いくぞ」

その時、女王の寢台の中で何かが動いた。

「まだいたのか。さっさと帰るがよい」

大きな声で言う、まだ年の若い男が、女王の寢台から一糸まとわぬ姿で転げ出、自分の衣をつかむと、そのまま部屋を走り出た。

「なんだ、あの姿は。まるで年寄りのようじゃ」

「女王様、また若者の精気を吸い取っていたのですか、お盛んですな」

「うるさい、これも国の為じゃ。女王がいつまでも若く美しくなくて、どうやって国を治めろというのじゃ」

「おっしゃる通りでございます。では、まいりましょう」

「うむ」

謁見の間に行くと、隣国の使者が、玉座の前にかしこまって待っていた。女王の姿を見ると立ち上がり、深々とお辞儀をした。

「女王様におきましては、いつも変わらぬお姿をお見せいただき、大変光栄に存じます。八百万の神々の中でも女王様の美しさは、

一際立っております」

「もうよい、座れ」

「はっ」

使者はまた腰を下ろした。

「それにわらわは、神ではないぞ。そのような事を言うと、本当の神々にどんな仕打ちを受けるかわからぬ」

「とんでもございません。女王様が神々の血を引いている事は、皆に知れ渡っております。戦いの時に受けた傷も御自分でお直しになつたとか」

「これか」

女王は立ち上がり、衣をずらして、使者にその豊かな乳房を見せた。

「おお、これはもつたいたい。目が潰れます」

使者は指で目を覆いながらも、しっかりと、隙間から、その乳房に残る傷を見ていた。

「戦いの時に、刃がかすつたので、自分で舐めて治しただけの事よ。大した事ではない」

「左様でございますか」

女王が衣を元に戻したので、使者は安心して手を下に置いた。

「ところで、はるばる隣国から来たのはどうゆう訳じゃ。何か不穏な動きでもあるのか」

「いえいえ、とんでもない。女王様の国とわが国は昔から友好国でありまして、これが覆される事はありません」

「では、いったい何の用じゃ」

「実は、わが国の一の姫様が、今度、女王様の南の国に輿入れする事が決まりました、ご報告と、それから、行列が御国を通過する事をお許し願いたくまいつた次第で」

「あの野蠻人に輿入れとな」

「はい。誠に恥ずかしい事ですが、姫をよこせと言われて断わる事ができないのです。もし女王様に王子がいらっしやれば、喜んで姫を差し上げるのに、と国王は嘆いております」

「なる程」

「まだ、他にも沢山姫君がおりますので、これからでも、王子がお出来になつた際には、是非婚約を、と申しております」

「わかつたわかつた」

鼻で笑った。

「それにしても何ですな。女王様はいつまでもお若く、まるで仙人のようだと皆がうわさしております」

「仙人とな？」

「はい。実は噂では山の洞窟に、もう二百年は生きているという

仙人がおるといふ事で。誰も会ったものはないのですが、噂だけと聞こえてくる次第で」

「では、会いにいけばいいではないか」

「それがそうもいかないのです。仙人の住む山には虎が住んでおりまして、恐ろしさの余り誰も近付く者がおりません」

「そうなのか。ところで、そなたの用事はそれで終わりか？ 姫君の婚礼を伝えに来ただけか？」

「左様にございます」

「そうか、では国王に承知したと伝えるがよい」

「ありがとうございます」

使者はまた深々とお辞儀をした。

女王は立ち上がり、部屋を出る際に、供に告げた。

「使者に馳走を用意するように」

「ありがとうございます」

何度も使者はお辞儀をした。

三 鏡の精

「鏡よ鏡、答えておくれ。この国で一番美しいのは誰だ？」

女王は手に持った鏡の表面を、自分の衣でぬぐいながら、尋ねた。

「それは女王様にございます」

「うむ。良き奴じや。ではこの国で一番勇気のある者は誰だ？」

「それは女王様に他なりません」

女王は鏡を通して鏡の精を見つめた。

「では聞くが、この世で一番美しいのは誰だ？」

その質問をすると、鏡の精は鏡の中で、ぶるぶると震えだした。

「女王様、おゆるし下さい。おゆるし下さい。お願いでございます」

「何を許すと言うのじゃ。ただ、問いに対する答えを求めているだけだというのに」

「お許し下さい」

鏡の精は鏡の奥に逃げ込んで見えなくなった。

「この臆病者め」

そう言うと、女王は鏡を部屋の隅に投げつけた。鏡は振動でしばらく低いうなり音を立てていたが、しばらくすると、静かになった。

部屋が静まり返ると、女王は立ち上がり、サンダルの音を響かせながら、歩き回った。

「全くどいつもこいつも愚か者じゃ。おべんちゃらばかりで、いったい本当の事を言う者はおらぬのか」

部屋の中を三回程回ると、再び、部屋の隅に落ちていた鏡を拾っ

た。そして、自分の顔をまじまじと見た。

いつもと変わらぬ美しい顔ではあったが、目の端に、うっすらと皺ができているのを、認めないわけにはいかない。

「恐れながら、薬草をお持ちしました」

宰相と共に、また、少女と言っている位の年の召使がやってきて、薬草をすりつぶした液体の入ったゴブレットを、盆に載せたまま差し出した。

女王はゴブレットを掴むと、一気に飲み干し、盆の上に置いた。

召使は、お辞儀をすると、部屋から出ていった。

「新入りだな」

女王は宰相に話しかけた。

「左様でございます。奥の召使の娘です。先日からこの城内で、

働き始めました」

「年はいくつだ？」

「さあ、確か十二、三だとか」

「そうか」

「何故そのようなに悲しそうな顔をなさいます。女王様は、いくつになられても、昔のまま、お美しくあられますのに」

「おべんちやらはもうよい」

宰相は口を閉じた。

「それはそうと、隣の国に、仙人がおるそうだな」

「仙人でございますか？」

「今朝、隣国からの使者がそう言っておった」

「左様でございますか」

「会いに行ったら、不老不死の秘密を授けてくれるだろうか？」

「それはもう。女王様の御意思に背く者など降りませぬ」

「それはそうだな。金銀でも積めば、尚更であろう」

「城の中の一番上等な輿をご用意いたします。隣国の使者にもそう伝えましょう」

「よきに計らえ」

四 虎の大群

「まだつかぬのか」

女王は輿の中から尋ねた。

「もう少しにございます」

お付きの者が近くで答えた。

「もう少し、もう少し、ばかりではないか。いい加減着いてもよからう」

女王は儀式の時に身につける最上の衣を身につけ、頭には冠をい

ただき、首には貴石の首飾りをしていた。

が、長旅のせいか、疲れきっているように見える。

「申し訳ありません。しかし、本当にあと少しなのです。仙人が住むという頂が見えております」

「そうか」

ため息をついて、輿の中で座り直した。

一行は、しばらく行く進むのをやめ、輿の地面に下ろされた。

「もう着いたのか？」

女王が外に出ようとすると、声がした。

「今、出てはなりません。虎の大群が我々を取り巻いておりま
す」

我慢できなくなった女王は、御簾を押し、外を見た。すると、本当に虎が近くまで来ているのがわかった。一行を取り巻くようにして、何匹もいる。

お付きの者達は、皆、緊張して、手に手に刀を持っている。

しかし虎達は、様子を伺うように、ゆっくりと周りを歩き、襲ってはこない。

「何をしに参った」

急にどこからともなく声が聞こえた。

「誰じゃ」

女王は輿から出て叫んだが、返事はない。

「虎の奴め、妙な真似をしておって」

自ら、短剣を輿から引き抜くと、近くににいる虎を掴んで、刺し殺した。

急所をついたのか、すぐに虎は動かなくなった。

そして、次々に襲ってくる虎共を、次から次へと、短剣で、息の根を止めてしまった。

「女王様」

全ての虎が、地面に倒れると、お付の者達が女王にとりすがった。「何ともない。虎は成敗したので、もう行く手を阻む物は何もないぞ」

「ご覧下さい。虎が溶けていきます」

見ると、地面に横たわっていた虎の死骸が、次第に形を失い、黄色い液体となっていくた。

「なんとという事。随分弱いと思ったら、まやかしか」

女王は高笑いをすると、輿の中に入った。

「出発じゃ」

「はい、女王様」

五 仙人の洞窟

「女王様、到着いたしました。おっしゃられたような洞窟があります」

一行は険しい山を登りつめ、山をえぐったようなくぼ地に来ていた。その窪みの奥に、穴が開いており、中にずっと続いているようだった。

女王が輿を降りると、その洞窟の中から、白い長い髭を生やした老人が出てきた。

「そなたがここに来るのはわかっていた」

女王は老人が女王にお辞儀をしないのを、不満に思い、ぶっきらぼうに言った。

「わかっていたなら、話は早い。わらわが何を求めてやってきたのか、知っておろう」

急に老人は顔をしかめた。

「はて、何をお探しかな」

「とぼけるな、老人。わらわは、不老不死の策を求めてやってきたのじゃ」

「それなら子孫を作る事じゃ。子孫が出来たら、そなたの命は永遠に引き継がれる事であろう」

「子供だと、この老いぼれめ。そんなありきたりの事を聞きにきたのではない」

お付きの者達は神妙な顔をして頭をうなだれていた。

「わしの忠告が聞けぬのなら、帰るがよい。そなたに一番必要なのは、そなたの血を引いた子孫じゃ」

「えい、うるさい。仙人だというから来てみれば、ただの長生きしている年寄りではないか。ちよつとぐらい人より長生きしているからと言って、えらそうな口をきくでない」

女王は老人の衣をつかみ、激しく揺り動かした。

「不老不死の薬をそなたは、持っているのか持っていないのか、正直に答えよ」

老人は顔に挑むような表情を浮かべた。

「えーい、ごさかしいやつ。お前は仙人でも何でもなし、ただの長生きをしている年寄りじゃ。年を言ってみよ」

「二十歳にございます」

「ふざけるな」

女王はそのまま老人を、力いっぱい地面に叩きつけた。老人の体は地面の上で、身動き一つしなかった。

一人の付き人が、老人に近づき、胸に手をあてた。

「女王様、この者、もはや息をしておりませぬ」

「何？死んだと？では、やはりただの年寄りだったと見える」

そう言うと、女王はさっさと輿の中に乗り込んだ。
あわてて供が、輿に戻り、輿を持ち上げた。

「国へ帰るぞ」

「かしこまりました」

六 王の寝室

女王は一人で塔の階段を登っていた。階段には所々たいまつが灯され、外の光のささない階段も、明るくなっている。

女王は石の壁を触りながら、一段一段登っていた。

一箇所火が消えているところがあつた。女王はそこで手をかざした。

「まだ暖かい。つい先ほどまで火が燃えていたのであろう」

そして、今度はかざした両の手のひらを返して見た。

「どうして、仙人を突き飛ばしてしまったのだらう。殺すつもりなどなかったのに」

女王の手の指は、いつもと変わらぬ、白い長い指だった。

「最初は子供を作れと言われて腹が立ったが、それが道理かもしれぬ。今になってみると、お告げのように思える。今宵は王との間に子を儲けたい」

階段を登りつめた所に、王の寝室があつた。

女王はその木の扉を軽く叩いた。

「ひっ、女王様」

扉の横で眠りこけていた小姓が目を覚ました。

「しっ」

女王は人差し指を口にあてた。

「よいのじゃ。王に会いにきただけだから」

そう言うと、もう一度扉を叩いた。

「誰だ」

中から国王の声が聞こえる。

「私でございます。たった今、隣国から帰ってきたところでございます」

戸を開け、中に入った。部屋の中は窓から月明かりがさし、うっすらと明るかつた。

「どうしたんだ、こんな時間に」

国王は寝台の中から尋ねた。

「あなた様に会いにまいりました。いけませぬか？」

そう言って、女王は国王の寝台にもぐり込んだ。

国王は寝台の中で身を固くした。

「いったい何をしに来た。今まで私の部屋などよりつきもしなか

ったのに」

「それは誤解です。あなた様がお避けになるような素振りをするので、私も、この寝室から遠ざかっておりました」

「ではいったい今日は何をしに来たのだ」

相変わらず国王の声は冷たかった。

「子を儲けにでございます。この国の繁栄の為には、国王と女王の間に子がいるのが一番かと思えます」

女王は国王の肩に手をかけた。

「ならぬ。ならぬ。ならぬ。そなたは、いつも自分の寝室に若い男を呼んでいるではないか。夜な夜な男の精気を吸い取っていると噂じゃ」

王は寝台から飛び出して、仁王立ちになった。

「お言葉ではございますが、そのような者達と御自分を一緒にされては困ります。あなた様は、高貴な血を引くお方。高貴な者は高貴な者としか子を生す事はできないのです。それはあなた様もご存知でしょう」

「とにかくならぬ。子を生すなど、もつての他じゃ。自分の部屋に戻るがよい」

国王は月の光を背に受け、じっと立ったままだった。

女王はしばらく国王を見ていたが、やはり寝台を出て、立ち上がった。

「今日は疲れた。長旅の疲れかもしれぬ。早く寝る事にしよう」
そうつぶやくと、何事もなかったように部屋を出ていった。

女王のサンダルの音が階段に響いて間もなく、人影が、国王の寝台の下から出てきた。

それは、この国の宰相だった。

「危ない所でしたな。でも、今宵はもう戻ってこないでしょう」
そう言うと、国王に接吻をした。二人の体はもつれ合うように、寝台に倒れ込んだ。

七 子供の顔をした若者

「失礼いたします」

松明の明かりの元、女王が髪の毛をとかしていると、人影があらわれた。

「誰じゃ」

女王は暗がりを目をこらした。

「今宵の女王様の夜のお供を仰せつかった者でございます」

「何だと？まだ子供ではないか。こちらへ来てみるがよい」
松明の近くにその若者を呼び寄せた。

「何とまあ、このように小さい者は、今まで見た事がない」
若者は氣まずそうに、足元を見た。

「年はいくつじゃ？」

「十七にございます」

「十七？とても十七には見えぬぞ。せいぜい十かそこらじゃ」

「申し訳ございません。私の家では、弟や妹が大勢おりまして。

お腹をすかした兄弟を見ると、どうも不憫で、私の食べ物をいつも分け与えておりました。そのせいでいつまでたっても背が伸びず、子供のような背格好をしております。

「弟や妹？お前自身が小さな子供ではないか」

「左様でございます」

「わらわの夜の相手は務まるまい」

「お願いでございます」

「何だ？」

「今宵女王様のお相手が出来なければ、家の者が恥をかきますし、私の家には戻れません。せめて一夜をご一緒させていただけませんかでしょうか」

「来てしまったものは仕方がない。好きにするがよい」

そう言うと、女王は、手に持っていた櫛を鏡の前に置き、自分の寝台に入った。

若者も音を立てずに、反対側から女王の寝台に入った。

そして、そっと女王の長い髪を触ったが、すぐに女王はその手を払い、若者に背を向けた。

夜中に急に女王は体を起こした。

そして、若者に告げた。

「明日の朝から私の小姓となるがよい」

若者は寝息を立てて、目を覚まさなかった。

八 南の国の国王

女王が盛装で客間に入ると、そこには南の国の国王が座っていた。既に馳走を目の前に、酒などもふるまわれ、美女が酌をしていた。

「お待たせいたしました、南の国の国王様」

女王がお辞儀をすると、国王は手を挙げた。女王は玉座についた。南の国の国王は、がっしりとした体格で、髭が濃く、体中獣のよ
うな毛で覆われていた。

「前触れもなく急にいらっしゃるとはどうゆうご用件ですか？先

日もうすぐご結婚なさると聞きました。まさか、その事を知らせに来たわけではありますまい」

「はは、そのまさかじゃ。きつと結婚したら女王にも会えなくなると思つて、顔を見にきたのじゃ。まだそなたを妻に迎える事をあきらめたわけではないぞ」

「お上手だ事。その手には乗りますまい。それに、結婚されても奥方の尻に敷かれる国王でもありませんまいに」

「まあ、それもそうだ。それはそうと、そなたの国王はどうだ？ 相変わらず尻に敷かれておるのか？」

女王は一瞬嫌そうな表情を浮かべた。

「下がってよい」

国王は、お酌をしている美女諸共、お付の者を部屋から下がらせた。

「実は、最近良くない噂を聞いたので、心配してきたのだ」

「良くない噂？」

「そうだ。民の心が女王から離れているらしい」

「どうゆう事ですか？」

「つまりだな。この国の誰かがそなたの悪い噂を流し、悪者にした上で、この国を乗っ取ろうとしているのだ」

「そんないったい誰が？」

「それはわからぬ。しかし、一番に考えられるのは、そなたの国王じゃ。いつもそなたの陰になって、目立たぬ存在になっているからな」

「陰になど、とんでもない。いつも自分から塔のてっぺんにこもつて、文書を広げたり、わけのわからぬ事を口走っているのだから。います。そうしたくてそうしているだけでしょう」

「そうかもしれないが、人の心はわからぬものよ。そなたも氣をつけるがよい」

「ご忠告ありがとうございます。万が一にもそのような事はないと思ひますが」

「そうだといいが」

「それはそうと、私は、先日仙人に会いに参りました」

「仙人とな」

「はい。不老不死の知恵を授かりたく、参ったのですが、わざわざ行つてみれば、ただの長生きしている年寄りにございました。そんな者に教えてを請いに行ったのかと思うと情けない程でございます」

「不老不死の知恵とは」

「はい。誰もがいつまでも若く美しくありたいと思うものでしょう」

「そうかもしれないな、女は」

「何をおっしゃいます。いつまでも若くありたいと思わないのですか？」

「別に。男は権力さえあれば、若かろうが年をとろうが関係ないのだ」

「そんなものなのではようか」

女王は元気がなくなつた。

「けれど、わしも、砂漠の向こうに、もう何千年も生きている若者がいると聞いた事がある」

「何千年？それは確かなのですか？」

「いや、確かではない。噂だ」

「そうですか」

「わしの国の南に広大な砂漠が広がっているのは知っておろう」

「はい」

「その砂漠の向こうに湖があつて、その湖の畔に若者が住んでい
るらしい。金の色の髪をして青い透き通った目をしているらしい」

「それは珍しい。どこから来たお方ですか？」

「それはわからぬ。とにかく、人の言い伝えによれば、気がついたら、そこに住んでおつて、全く年をとらぬそうな」

「会ってみようございます」

「それはやめた方がいい」

「何故でございますか？」

「砂漠だ。多くの者がその砂漠で命を落としておる。とても危険
なのだ」

「左様でございますか」

「そうだ。それよりも、独身時代の最後の思い出にわしに酒を注
いでくれまいか」

「お安い御用でございます」

女王は立ち上がり、南の国王の横に座つた。そして酒器を取ろう
として手を伸ばすと、その隙に、国王が女王の肩を抱いた。

「不思議なものだ。わしがそなたに会つたのは、そなたがまだ十
五の時だった。あれからもう二十年もたとうとしている」

「女に、年の話は無用でございます」

「いやはや、そうであつた」

女王は酒器を持ち、国王の杯になみなみと酒を注いだ。国王はそ
の杯を口に寄せ、一気に飲み干すと、抱き寄せた女王の肩に唇をあ
てた。

九 民の反感

「うわー」

ある日の朝、城壁の向こうから、民が集まって騒いでいるのが聞こえた。

「いったい何事だ」

女王は部屋から出て、ベランダに姿を現した。すると民の声はますます大きくなった。

「わらわの姿を見て喜んでおるのか」

女王は相好を崩して手を挙げた。

すると、石のような者が女王に向けて投げられた。

女王は咄嗟に身をかわし、片手でその石を受け止めた。

石は白い布でくるまれており、卑猥な姿をした女王の姿が描かれていた。

「ふん」

その石をベランダから投げ捨てると、部屋の中に入った。

部屋の中には宰相が立っていた。その後ろには女の召使いが控え、薬草の入ったゴブレットを持っていた。女王は、それを手に取ると、一気に飲み干した。召使は、すぐに空になったゴブレットを持って部屋から出ていった。

「嘆かわしい事です」

宰相が言った。

「いったい何が起こったというのじゃ。なんであのように興奮しておるのじゃ」

「わかりませぬ。ただ、女王の若者好きが、一気に知れ渡った可能性があります」

「何故、今になって。それは以前からの慣習ではないか」

「では、女王が仙人を投げ殺した事が原因では」

「それを何故そなたが知っておる？」

「それはもう城中の者全員が知っております。いつか罰があたるのではないかと心配する者も少なくありません」

「いった誰が喋ったのだ。この手で成敗してくれる」

女王は短剣を取り出すと、部屋を出ようとした。それを宰相が後ろからとり押さえた。

「女王様、おやめ下さい。さらに騒動が広まるばかりです。それよりは、身をお隠しになってはいかがですか？」

「身を隠してどうするのじゃ」

「女王様のお姿が見えなければ、民が騒ぎの矛先をどこに持っていくかわからず、いずれ、収まるでしょう。そのうち、何を大騒ぎしていたのか、忘れてしまうやしません」

「そうだな。愚かな民の事だ。きっと忘れるに違いない」
そう言うと、女王は、狂ったように笑い声をたて、奥の部屋に入
ってしまった。

十 旅立ち

「では行ってまいります」

女王を乗せた輿が静かに持ち上げられた。

「ああ、道中気をつけて」

見送りに来ていた国王が言う。

「いつになく優しいのですね」

「もう会えなくなると思うと、つい気になつてな」

「何をおっしゃいます。すぐに戻ってまいりますからご心配なく。
愚かな民はすぐに悪い噂など忘れてしまえます。そうでしょう、宰
相」

「勿論ですとも」

一歩下がって女王の旅立ちを見守っていた宰相が言った。

「そうだとも。本当にそうだとも」

自分に言い聞かせるように、国王がつぶやいた。

「では、もうそろそろ夜が明けますので、出発いたします。私の
いない間、この国をよろしくお願いいたします、国王様」

「ああ」

国王は気のない返事をした。

「では、御機嫌よう」

その女王の声で、一行は静かに進み始めた。城の裏の城門が開け
られ、夜明けの城下町をすべるように出ていった。門が閉められる
のを見届けると、宰相は国王に声をかけた。

「いつまでも外にいますと、風邪をひきます。中に入りましょう」

「そうだな」

とぼとぼと歩く国王の後ろに宰相が続いた。

女王の一行は街を通り抜け、荒野に入った。時々隊商の通る道が
あるだけで、あとは何も無い。険しい道を進む輿が、大きく揺れた。

「痛いではないか。もっと静かに進めぬのか」

女王は輿の中から叫んだ。それを合図のように、輿は地面に下ろ
された。それから、何の物音もしない。

「いったいどうしたというのだ。返事をせよ、返事を」

輿から出た女王は目を丸くした。

「何という事。誰もおらぬではないか。どうした、皆のもの、ど
こにおる」

大きな声で叫んだが、返事はない。

「小姓よ、お前まで行ってしまったのか」

そうつぶやいて、女王は力なく下に座りこんだ。

「ここにおります」

遠くから小姓の叫ぶ声が聞こえた。

女王は立ち上がり、声のする方を見た。

「おお、いったいどこに行っていた。心配するではないか」

小姓は走って女王の足元で跪いた。

「すみませぬ。皆が急に走って行ってしまったので、せめて女王様の印だけでもとり戻そうと思つて、荷物係を打ちのめしておりました」

小姓はその女王の印を見せた。

「それはご苦労であつた。礼を言うぞ。しかし、何でまた皆は消えてしまったのか理解できぬ」

「それが・・・」

「何じゃ、遠慮せずに言つてみよ」

「女王様は淫売だと、皆が口々に申しまして、急に逃げ出してしまったのです。私にもわけがわかりませぬ。まるで皆が示し合わせたかのように、私以外の者達は、あつという間に走つていってしまったました」

「そうであつたか。きっと誰かの差し金であろう。情けない事よ」

「いったいこれからどうなさいますか？目的地まで行つても、女王様をお迎えする用意があるかわかりません」

「そのような事は言わんでもよい」

「失礼いたしました」

「南の国へ行こう。南の国の国王であれば、わらわをかくまってくれるかもしれぬ。いや、かくまってくれるに決まっておる」

「かしこまりました。どこまでも女王様のお供をいたします」

小姓は頭を垂れて、女王に敬意を示した。

十一 門番

「ここでございますか？」

「以前に一度だけ来た事がある。ここに違いない」

その南の国の城は、女王の城より随分小さい城だった。

小姓が門を叩くと、覗き穴から門番が目を見せた。

「何の用だ」

「隣の国の女王が、この国の王にお目通りを願っております」

「女王だと。馬鹿を言うな。たった一人しか供がない女王がい

るか」

「本当です。その証に、女王の印をお見せしよう」

小姓は大事に袋に入れて運んできた女王の印を覗き穴の前で見せた。

しかし、門の向こうでは何の動きもなかった。

「どうした、門を開けぬのか」

「それが本物の女王の印なのかおいらにはわからねえ。しかし、国王に会う事はかなわぬ」

「それは何故だ」

「なぜなら国王はここにいないからだ。婚礼の準備であちこち飛び待っている。いないのだから仕方ないだろう」

「何故それを先に言わぬ」

「見知らぬお前さん方に一々説明する筋合いはない」

「もうよい」

後ろでやりとりを聞いていた女王は、とうとう口を開いた。

「人を頼りにしたわらわの方が間違っていた。いくぞ」

「行くといつてもどこへ？」

「さあ、とにかくどこかに身を隠しておかなくてはなるまい。そなたの親類縁者はこの国にはおらぬのか」

「ありません」

残念そうに小姓は首を振った。

「そうか」

二人はずっと荒野を歩き続けて、服は汚れ、くたびれきっていた。もう、これ以上旅を続ける事は難しいそうだった。

十二 女王の鏡

「わしも年をとったものだ」

国王は女王の部屋で女王の鏡に映った自分の顔を見ていた。あごひげをなでつけている。

「そろそろ女王の遺骸を捜しにいかねばならぬ」

国王が荒野の横たわる女王の屍を思いうかべたその時、鏡には全く違う風景が映し出されていた。

それは異国の城下町を、小姓を連れて歩いている女王の姿だった。

「何と、まだ生きておったとは」

一瞬安心し、その後、国王の心に怒りがこみあげてきた。

「どこまでしぶとい女なのだ」

鏡を持つ国王の手がわなわなと震え出した。

「宰相を呼べ、宰相を」

「かしこまりました」

部屋の片隅で控えていたお付きの者が部屋を出ていった。

十三 天幕の中

「今宵は楽しかった」

天幕の中にしつらえられた簡素な寢床の中で女王はつぶやいた。そのすぐ横の地面に小姓も静かに横たわっていた。

「いつまでこのような生活が続くかわからぬが、民として暮らすのも気楽でいいものよ」

「左様にございます」

「お前には苦勞をかけるが」

「とんでもございませぬ。私には女王様のお供をさせていただくだけで幸せにございます」

「いつからそのようにお世辞がうまくなった」

「お世辞ではございませぬ。本当の気持ちでございます」

「そうか、いつの間にかわらわは、お世辞と本当の気持ちとの區別がつかなくなっておる」

「女王様・・・」

「もうよい、寝るとしよう」

「はい」

天幕を闇と静寂が訪れた。

女王も小姓も深い寢息をたてて眠っている。

しかし、何者かが、天幕の裾をめぐって中に入ってきた。暗闇に目をこらしている。足音を立てないように女王に近づき、手に持っていた刀を振り上げた。

「何者じゃ」

女王はそう言うなり、枕の下にあった短剣を手にし、男の腹に突き刺した。

「うっ」

男はそのまま仰向けにひっくり返った。

「いったい何者じゃ。わらわを女王と知っての事か」

女王は腹から引き抜いた剣をさらに男の喉元につきつけた。

目をさました小姓は男の手から刀をもぎとる。

「お許し下さい女王様」

「わらわを女王と知っての事。いったい誰の差し金じゃ」

さらに剣を男の首に食い込ませた。首から血がしたたり出る。

「隊長に命令されました。私は逆らえませんでした。出来れば女王様を殺したくはなかった。とつてもお強い方と聞いていたから。

でも命令だったので逆らえず」

「ええい、女々しいヤツ」

女王は一思いに剣を男の首に突き刺した。
血がほとばしり、男は息絶えた。

「こいつを川にでも投げ込むがよい。海に流れて魚のえさになるであろう」

「かしこまりました」

小姓は小さな体で男の死体を引きずっていった。

小姓が戻ってくると、女王はまだ起きたままだった。

「考えていたのだが」

「はい」

「ここにいつまでもいても仕方がない。またいつ殺し屋が来るかもしれないぬ。そんな事にかかわっているより、旅に出た方がいいのかもしれぬ」

「旅と言ってもどこへ？」

「南の砂漠のむこうじゃ。そこに湖があつて、湖の畔に聖者が住んでいるそう。その聖者に不老不死の知恵を授けてもらいに行きたい」

「不老不死でございますか」

「そうだ。私は自分の国に女王として戻るつもりだ。その時に、よぼよぼの婆さんでは示しがつかぬであろう」

「左様でございますか」

「ついて来てくれるな」

「勿論でございます」

「ありがとうございます」

「礼には及びません」

小姓は深々とお辞儀をした。

十四 砂漠

「暑い」

二人は砂漠の中をずっと歩きどうしだった。

できるだけ日陰を選んで歩こうとするのだが、日陰らしい日陰もなく、持ってきた食料も水もつきてしまった。誰かに分けて貰おうにも、人っこ一人いない。

「隊商でも通らないだろうか」

女王は手で目に影をつくりながら言った。

「無理かもしれせん。ここは、皆が避けて通る魔の砂漠だと聞いた事があります」

「魔の砂漠だか何だか知らぬが、わらわは聖者に会いにきたのじや。必ずこの砂漠を越えてみせる。」

暑く乾いた空気に、女王の言葉は虚しく吸い込まれいく。

「どこかにオアシスはないのか」

女王の声に小姓は周りを見渡した。

「女王様！」

「なんだ」

「あの左手に見える影はオアシスではないでしょうか」

「左手」

女王も小姓の指差す方向に目をこらした。

「そのように見えなくもない」

「行ってみましょう。きっとそうです」

小姓は、子供が親の手をひっぱるように、女王の手首を持って歩き始めた。

「本当じゃ。わらわの目にもはっきり見える」

女王は小姓の手を振り解いて、走り出した。小姓も後から、砂に足をとられながらも、走ってきた。

「水だ。水だ。これで生き返る」

女王は小さいオアシスの畔で、手で水をすくって飲んだ。

隣で小姓も水を飲んだ。

「水がこんなにおいしい物には知りませんでした」

しかし、それには答えず、女王は、必死の形相で水面を見ている。

「この水に映る年寄りには誰じゃ」

「女王様」

「目は落ち窪み、頬はこけ、しわだらけの年寄りは誰じゃと聞いておるのだ」

女王は、水に手を入れて、水面を揺らした。

「女王様、おちついて下さい」

小姓は、狂ったように水面をかき回す女王の手を掴んだ。

「何をするのじゃ、小姓。あの婆さんは誰じゃと聞いておるのじゃ」

「女王様」

小姓は全身の力で女王を水面から引き離すと、そのままつれるように、砂の上に倒れ込んだ。

「女王様はいつまでもお若く美しい方です」

女王の目を見ながら、小姓は言った。

「では、あれは、水に映った姿は何じゃ」

「長旅でお疲れになっただけです。すぐに元に戻ります」

小姓の目は女王の目を離れなかった。

「小姓よ」

「何でございますか」

「そなたの男が大きくなっておる。いつから大人になったのじ

「女王様に初めてお会いした時からです。お気付きにならなかっただけ」
「そうかそれは悪かった。ではお前の精気を私の体に注いでくれ」
「かしこまりました」
小姓は女王に接吻した。

十五 二匹の虎

愛の交歓が終わると二人は砂の上に立ち上がった。
「行きましょう女王様」
小姓は女王の両手を握った。
「気のせいか、そなたの背が伸びたように思う」
「気のせいではありませぬ。女王様のお力で私は一人前の男になれたのです」

「本当に、今は十七の青年と言っても、誰も疑いはしまい」

「十八です」

「十八とな」

「はい。今日、私はひとつ年をとりました」

「誠に」

「それに女王様」

「何じゃ」

「女王様はお若くなられました」

女王は自分の指で口元や目元をさわった。

「本当じゃ。先ほどまでであった皺がなくなっておる」

「私の言った通りではありませぬか。女王様はいつまでも若くお美しいのです」

「そなたは何とかしこいのじゃ。いつまでもわらわの側にいるとよい」

「光栄でございます。では、さっそく聖者の元へ急ぎましょう」

「そうしよう」

二人は手に手を取り歩き始めた。

すると間もなく、行く手に二つの点が見えた。

その点はだんだん近づくとつれ、黄色と黒の縞模様の動物であるのが、はつきりしてきた。

「虎のやつ、またしてもわらわの邪魔をしに来おった。また成敗してやる」

女王は腰に下げた短剣に手をかけた。

「お待ち下さい」

小姓は女王の前に立ち、短剣の動きを制した。

「何じゃ」

「あの虎は我々を食いに来たのではありませんせぬ。我々を迎えに来たのです」

「何故そのような事がわかる」

「私にはわかるのです。それに、ご覧下さい。今、奴等は我々に背中を見せ、いかにも、我々にまたがってくれと言っているようではないですか」

虎達は実際少し離れた所にいて、こちらの様子を伺っているようであり、かつ、待っているようにも見えた。

女王は短剣を腰に収めると、そのまま導かれるように虎の側に行き、一匹にまたがった。

それに続いて、小姓ももう一匹にまたがった。

虎達はゆっくりと立ち上がり、前足を伸ばした。

「おっと」

急に動いたので小姓が体のバランスを崩した。

「たてがみを掴むのじゃ」

「たてがみ？」

「毛の一番深い所を持つのじゃ」

「はい、女王様」

こうして二人は虎の背にまたがり、砂漠を横切った。

虎達は目にも留まらぬ速さで砂の上を走ると、やがて、目の前に美しい湖が広がった。

ここで虎の歩みはゆっくりとなり、二人は景色を楽しむ事ができた。

「何と美しい。南の国にこのような美しい湖があるとは、当の国王も知るまい」

女王はすこぶる機嫌が良かった。

やがて虎達は、湖の前にたつ一軒の木の家の前まで来て、そこで止まった。

「ここらしい」

「はい」

二人は虎の背から滑り降りた。

十六 聖者

女王と小姓が木の家の前に立つと、何もしないうちに中から戸があいて、一人の若者が二人を招き入れた。

その若者は透き通るような白い肌をし、金色の髪の毛を豊かにたたえていた。

「あなた方が来るのはわかっていました」

中に入った二人に、そう若者は告げた。そこで女王はふと立ち止まった。

「はて、以前にもその言葉を聞いた事のあるような」

「そうでしょう。これは私の仮の姿なのですから」

そう言うと、若者は自分の額に手をやったかと思うと、自分の顔の皮の縦に破いた。

驚いた事に、その皮の下から出てきたのは、以前山奥の洞窟に住んでいた、仙人の顔だった。

「あ、あなた様は」

女王は驚き、床の上にひれ伏した。

「驚く事はありません。これもまた、私の仮の姿ですから。もうよいですから、顔をお上げなさい」

女王がおそるおそる顔を上げると、仙人は先ほどの若者の顔に戻っていた。

「ここではいつも私はこの姿なのです」

「でも確か、山の上の洞窟の前で、息が絶えてしまったのは？」

「息を止める事位、私には容易い事です。あの時はあなたがあまりに強引だったので、しばらく死んだ振りをしていただけです」

「お恥ずかしい」

女王は赤面した。

「で、今日こちらにいらしたのは、どうゆうご用件ですか？」

「あの時と同じです。不老不死の秘法を教えてください。決して老いる事す。私もあなた様のように、決して死ぬ事がなく、決して老いる事のない体になりたいのです」

「そうなつてどうしたいのですか？」

「私は自分の治めていた国から追われる身です。が、いつかまた、自分の国に戻つて、女王として君臨したいのです。その時に、老いぼれていては、人心もついて来はしないでしょう。今のまま若く美しい女王でありたいと思います」

「御事情はわかりました。しかし、私はあなたとは体の造りが違います。ですから私と同じようにというわけには参りません。ですが、あなたを不老不死にする事はできます」

「本当ですか？」

「本当です。しかし、あなたの体に多少の変化は現れると思いますが、それでもいいですか？」

「かまいません。不老不死になれるのなら」

女王は身を乗り出した。

「ではこれをお飲み下さい」

いつの間にか若者はゴブレットを手にしており、その中には黒い液体が入っていた。

「これは？」

「湖に生える、ある薬草をすり潰した物です。今までに多くの者がこの薬草を手にしようとして命を落としました」

「おお、なんと貴重な薬草であるか」

女王はゴブレットを手にして中の薬草を見つめた。

「お飲みなさい」

その言葉を聞いて、女王は一気にゴブレットの中身を飲み干した。「うう」

飲むなりゴブレットをほうり出し、地面に倒れてしまった。

「女王様」

小姓が寄り添ったが、女王は苦しそうに身もだえするばかりだった。

「女王様」

やがて小姓の目の前にで、女王の体は小さくなり、着衣の影に見えなくなった。

しばらくして衣の中から出てきたのは、一匹の緑色の蛇だった。

蛇は頭を持ち上げると、音もなく、戸の隙間から出ていった。

「いったいこれは……」

しばらくしてからやつの事で小姓が口を開いた。

「そなたの国の女王は永遠の命を手に入れたのです。行きなさい。そして皆にその事を告げなさい」

「あ、でも……」

「よいから行きなさい」

小姓は地面に落ちた女王の衣を拾うと、黙ってそのまま若者の家を出た。

十七 女王の証

小姓が国に戻ると、城では婚礼の真っ最中だった。大広間では祝いの宴が開かれようとしている。

小姓は、忙しそうに行きかう召使の一人を捕まえて尋ねた。

「これは誰の婚礼なのだ？」

「国王様と第二王妃様です」

「第二王妃様とは誰の事だ？」

「隣の国の姫君です」

その召使は不審そうに小姓を見た。

「いや、もういい、ありがとう。ところで宰相はどこに？」

「あそこです」

見ると、大広間の隅で、既に酒をしたたか飲んで真っ赤な顔をしている宰相がいた。

「恐れながら」

「何だ？誰だ、お前は」

「女王様の小姓でございます」

「何だと。お前のような奴は見た事がない」

「いえ、私です。女王様のお供で旅をしているうちに年をいくつもとりました」

「そう言われてみれば、見た事のあるような」

酔いが醒めた大臣は立ち上がって、天幕の陰に小姓を連れ込んだ。

「それで女王はどうなった」

「旅の途中でお亡くなりになりました」

「そうか」

宰相の顔には厳肅な表情が浮かんでいた。

「これが女王様のお召し物と、女王の証でございます」

小姓がうやうやしく宰相に差し出した。

「おう、それは丁度良い。姫君にこれを渡す事にしよう」

女王の証を手にとって言った。

「あの、お召し物は？」

「そのような物はいらん。処分しておけ」

「かしこまりました」

小姓は頭を下げた。

「ご苦労であった。そなたには牛を一頭授けよう。家に連れ帰るとよい」

「ありがとうございます。これで、大手を振って家に戻れます。

これからはのんびり暮らす事にいたします」

「そうするがよい」

牛を連れた小姓は、そのまま城を去っていった。

完